



TITLE:

比較認知発達(ベネッセコーポレーション)研究部門(Ⅲ.研究活動)

AUTHOR(S):

佐藤, 弥; 林, 美里; 高島, 友子

CITATION:

佐藤, 弥 ...[et al]. 比較認知発達(ベネッセコーポレーション)研究部門(Ⅲ.研究活動). 霊長類研究所年報 2007, 37: 72-73

ISSUE DATE:

2007-07-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/166465>

RIGHT:

- 1) Watanabe, K. (2006) Cultural Behavior of Monkeys. . Special lecture in the Biological Department, Shaanxi University of Technology, (中国漢中市陝西理工大学生物学系特別講義) (Nov. 2006, Hanzhong, China).
- 2) Watanabe, K. (2006) Cultural Behavior of Monkeys. Special lecture in the Biological Department, Northwest University (中国西安市西北大学生物学系特別講義) (Oct. 2006, Xian, China).
- 3) Watanabe, K., Rizaldi, Kamilah, S., Bakar, A. (2006) Present Distribution of 26 Mammal Species in Sumatra, Indonesia and Its Historical Changes? Preparation of the Database for Monitoring. JSPS-LIPI Core-University Program: International Symposium on Nature and Land Management of Tropical Peat Land in South East Asia (Sep. 2006, Bogor, Indonesia).
- 4) 平井啓久 (2007) テナガザル類の染色体進化. 大阪大学微生物病研究所マラリア学セミナー (2007 年 1 月, 吹田).
- 5) 川本芳 (2006) 種をめぐる 2 つの話題: マカクの新種と外来種問題. 京都大学霊長類研究所公開講座 (2006 年 8 月, 犬山).
- 6) 渡邊邦夫 (2006) アジアのサル: 現状と危機の構造. 第 22 回日本霊長類学会大会自由集会「野生霊長類の保全と保護活動の動向」(2006 年 7 月, 大阪大学人間科学研究科).
- 7) 渡邊邦夫 (2006) ニホンザル - 山積する課題と個体群コントロール. 哺乳類学会・京都大学公開シンポジウム「特定鳥獣保護管理計画の現状と課題」, 日本哺乳類学会・環境省主催 (2006 年 9 月, 京都大学百周年時計台記念館).
- 8) 渡邊邦夫 (2006) スマトラ島における現生中大型哺乳類の分布現状およびその歴史的変遷に関する調査研究. 第 12 回プロ・ナトゥーラ・ファンダ助成成果発表会・Amsir Bakar 博士への助成に対する推薦者としての内容紹介発表. (2006 年 12 月, 東京 主婦会館プラザ F).
- 9) 渡邊邦夫 (2006) ニホンザルと里山の自然. 犬山市民総合大学 (2006 年 10 月, 犬山里山学センター).
- 10) 渡邊邦夫 (2006) 失敗した国立公園の運営: インドネシア, 中部スラウェシ州ローラ・リントゥ国立公園の例から. 第 178 回中部人類談話会 (2006 年 11 月, 椋山女学園大学椋山人間学研究センター).

その他

- 1) 平井啓久 (2006) 「テナガザルの並外れて高い染色体多様性の謎」. 生物多様性研究—その魅力と楽しみ—: 58-60.

比較認知発達 (ベネッセコーポレーション) 研究部門

佐藤弥 (助教授), 林美里 (助手)

高島友子 (技術補佐員)

研究支援分野: 思考言語分野・認知学習分野

< 研究概要 >

A) 表情コミュニケーションについての実験心理学的研究

佐藤弥

表情や視線による対人コミュニケーションにおける情報処理過程を, 反応記録・ビデオ録画・筋電図計測などにより検討した. 定型発達者および発達障害者を対象とした.

B) 表情コミュニケーションについての神経科学的研究

佐藤弥

表情や視線による対人コミュニケーション課題を遂行中の神経活動を, fMRI・深部脳波などを用いて計測した.

C) チンパンジーとヒトの比較認知発達研究

林美里

物の操作や道具使用を指標として用い, チンパンジーの認知発達を調べる研究をおこなった. 積木やカップを用いた課題を, おもにチンパンジー乳児 3 個体を対象に実施した. 同じ課題をヒト乳幼児にも実施して, 直接比較をおこなった. ヒトの研究は竹下秀子 (滋賀県立大学) 氏との共同研究である.

< 研究業績 >

原著論文

- 1) Sato, W., Yoshikawa, S. (2007) Enhanced experience of emotional arousal in response to dynamic facial expressions. Journal of Nonverbal Behavior 31: 119-135.

総説

- 1) 佐藤弥 (2006) 鼻部皮膚温は情動の質的指標となるか? 量的指標となるか? ベビーサイエンス 6: 9-11.

報告

- 1) 魚野翔太, 佐藤弥, 道又爾, 吉川左紀子, 十一元三 (2007) 状態不安と恐怖表情が視線による注意シフトに与える影響. 電子情報通信学会技術研究報告 HCS 2006-65: 37-42.

その他雑誌

- 1) 赤木和重, 林美里 (2006) ちびっこチンパンジー 第 60 回 他者を通して学ぶ. 科学 76(12): 1202-1203.

翻訳

- 1) 佐藤弥, 十一元三 訳 (2007) 自閉症の原因に迫る. (Ramachandran, V. 著, Broken mirrors) 28-36, 日経サイエンス 2007-2.
- 2) 佐藤弥 訳 (2007) 他人を映す脳の鏡. (Rizzolatti, G. 著, Mirrors in the brain) 18-26, 日経サイエンス 2007-2.

学会発表等

- 1) Hayashi, M., Takeshita, H. (2007) Cognitive Development in Chimpanzees and Humans Assessed by Stacking-Block Tasks. 2007 Society for Research in Child Development Biennial Meeting (Mar. 2007, Boston, USA).
- 2) Hayashi, M. (2007) Cognitive development in object manipulation tasks by chimpanzees and humans. The Mind of the Chimpanzee (Mar. 2007, Chicago, USA).
- 3) Ogura, T., Hayashi, M., Matsuzawa, T. (2007) Problem Solving by Foresight in the Means-Ends Tasks in Chimpanzees (*Pan troglodytes*). 2007 Society for Research in Child Development Biennial Meeting (Mar. 2007, Boston, USA).
- 4) 赤木和重, 林美里 (2007) チンパンジーにおける社会的参照 - 他者が対象物に恐怖を示したときの反応から -. 日本発達心理学会第 18 回大会 (2007 年 3 月, さいたま).
- 5) 魚野翔太, 佐藤弥, 道又爾, 吉川左紀子, 十一元三 (2007) 状態不安と恐怖表情が視線による注意シフトに与える影響. 電子情報通信学会 (2007 年 3 月, 名古屋).

附属施設

ニホンザル野外観察施設

渡邊邦夫 (教授), 室山泰之 (助教授)

冠地富士男, 鈴村崇文 (技術職員)

鈴木克哉 (教務補佐員)

郷もえ, 山田彩, Rizaldi, 張鵬, 神田恵,

原澤牧子 (大学院生)

本施設は, 代表的な野生ニホンザルの生息地において, その生態や個体群動態に関する研究を継続的に押し進めることを目的として設置された. 基本的な生態学的資料を蓄積することは, 生態や社会についての研究を展開する上で必須のことであるが, 種の保全や個体群管理を行う上でも不可欠な基礎的作業である. 近年国内各地で頻発している猿害問題をはじめとして, 野生ニホンザル個体群管理の問題が社会的に注目されており, 当施設では霊長類の保全や個体群管理の研究にも積極的に取り組んでいる.

例年通り, 各研究林で継続的に行われている野外調査にスタッフが参加し, その現状把握を行った. 具体的には, 幸島での観察を継続しているほか, 屋久島西部林道地域や下北半島での調査を行い, その資料収集を行った. また保全にかかわる研究としては, 被害管理を含む個体群管理のための基礎的調査, 飼育個体を用いた実験的研究などを, 行っている.

現在の施設運営は, 屋久島・下北・幸島の 3 研究林・観察ステーションに重点をおいている. 上信越・木曽研究林の研究活動は, 保全生態学や野生動物管理学分野への取り組みと関連して, 将来の新たな形での再編成を模索しているところである. なお屋久島研究林の運営については, 社会生態部門助手の杉浦秀樹の全面的な協力を得て行っている.

2006 年度の各地ステーションの状況は, 次の通りである.

1. 幸島観察所

幸島では, 1952 年餌付けが成功して以来, 全頭個体識別に基づいた群れの長期継続観察が続けられている. 平成 18 年度の出産は 11 頭であり, 内 1 頭が死産であった. 主群はホタテが 2002 年以降安定して第 1 位オスの地位を確保しており, 以下ホッケ, ユダ, ズアカがそれぞれの地位を占めている. マキグループはすっかり様変わりしたが, 相変わらずコベが 1 位, 2 位がホッキ